
魔王と王女シリーズ

流音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と王女シリーズ

【NZコード】

N5769F

【作者名】

流音

【あらすじ】

毎日一人寂しく暮らす魔王ディア。そんなディアが住む”夜行城”に、ある日、侵入者が現れます。その侵入者は、それはそれは、とても美しい女の子でした。ディアは今まで何度も美しい王女様を見た事がありましたが、そんなの、比べ物にならない位に、その女の子は綺麗だったのです。その子は、「私はココに住む為に来たのよ」と、言いました。

プロローグ

どこの世界にも魔王といえば、国を支配したり人々を傷つけたり……なんていうイメージがあります。

この物語には、数多く居る魔王の中でも一番氣弱なディアルートという名前の魔王が出てきます。

ディアルートは、仲間達から”ディア”の愛称で呼ばれ、魔王とういうことを認められています。

氣弱だけれど、魔王様。

魔王様だけれど、寂しがり。

ディアは、魔王の城”夜行城”に一人で住んでいましたが、広い城に一人。

臣下は居ますが、自分を包み込んでくれる人が居ません。
それに耐えられず、魔王らしく様々な国の王女様を攫つていました。

……ですが、攫ったのは良いけれど、良心が痛み、王女様を助けに来た勇者にすんなりと倒されてしまったのでした。

毎日一人寂しく暮らすディア。

そんなディアが住む”夜行城”に、ある日、侵入者が現れます。

その侵入者は、それはそれは、とても美しい女の子でした。

ディアは今まで何度も美しい王女様を見た事がありましたが、そ

んなの、比べ物にならない位で、その女の子は綺麗だったのです。

その子は、

「私は□□に住む為に来たのよ」と、言いました。

話を聞けば、その子はある國の王女様なのでした。

もちろん、毎日寂しい思いをしていたディアが断るはずがありません。

少し氣の強い王女様ですが、そんなところもディアは大好きになりました。

第一話

遠くで、恐らくなれば狼と思われる生き物の遠吠えが聞こえた。それは大地を震わせるほど力強く、日が昇るたびに耳にする。

一体、何を思つて鳴いているのだろうか。

遠吠えと同時に、魔王が住む“夜行城”^{やこうじょう}で一人の少女がベッド大人五人は楽に寝れるサイズからむくりと上体を起こした。少しきせのある髪がさらりと背を流れる。その髪の色は、見るもの全てに瑞々しく茂る木々を連想させるだろつ。

少女は身体を一度、大きく伸びをした後、身支度を始めた。

「今日もやつぱり朝が来た〜明日は朝が来ないかも〜」

身支度を済ませた後、爛々と蒼の瞳を光らせ不吉な歌を口ずさみながら、少女はだだつ広い廊下を歩く。歩いているといつても、その速さは並ではない。

その調子で廊下をすんずんと突き進んでいく少女。

ところがふ、と落ちているものに目をやり、ピタリと急に足を止めた。

その“もの”とは黒く、少女が触れた途端大きく身を震わせる。

「……ディア、おはよー」

満面の笑みで語りかける少女に、ディアと呼ばれた少年はあからさまにホッとした様子で言葉を返した。

「おはよう、メツ、痛ツ……メモリ……」

ディアは途中で下を嚙んだ事に頬を染めながらも、少女の名を音にした。

瞬間、ディアの金の瞳が大きく開かれる。

メモリが、ディアの人より尖った耳を力いっぱい自身の方へと引っ張つたのだつた。

「い、痛いよツメモリ！」

「人の名前で嚙んでんじやないわよ。そ・れ・に、いつも言つてる
じゃない！」

面倒くさいからつて、廊下で寝ちやだめだつて！…

「でも……眠かつたし」

ディアの言葉は、正に”火に油を注ぐ”、だ。

マイペースなディアとは違い、メモリは気分屋なのだが
リマイペースと意味が変わらないのはこの際置いておこう
イアやお金に関しては妙に細かくなる。

「眠かつたし。
風邪引くでしょ！」
じゃ、ないでしそうが。眠いからつて廊下じゃ

「こんだけ部屋があるんだから、浴室とは言わないけれど、せめて近くの部屋に入つてから寝なさい。良いー！？」

返事を求めるが、ティアは何故か嬉しそうに手を細めているだけ。再度問い合わせると、ようやく口を開いた。

「僕の事、心配してくれてたんだ」

思いもしなかつた返答に、メモリはういと詫葉に詫める。メモリは眉間にきゅっと寄せながら言んだ。

「な、何言つてんの！？ 私はあなたが……」

「僕が”魔王だから”でしょう？大丈夫。分かつてゐるから」

私は、先に朝食食べてくるから。ティアも顔洗つて、早く来なさいよ」

そう言ひ残すと、メモリをまるで競歩のよつな速さで歩いて行つ

た。

一人つきりになつたディアは一度何か小さく口の中で呴き、メモリに言われた事を守るためにその場を後にする。

ディアが何を言つたのか、誰も知る由もない。
と、なれば良かつたのだが、そうもいかなかつた。

ディアとメモリが話していた廊下のすぐ、傍。

丁度死角になつて見えない場所に、長年この城に使えている魔物
”夜鬼”^{やつぎ}の”夜灯”^{よみび}が密かに隠れていたのだった。

世間では鬼と呼ばれている種に属している夜鬼の彼だが、外見は人間とそう変わる事はない。

ただ、頭の両端に角が一本生え、瞳が血の様に紅いだけだ。
あとは少し身体が頑丈で、少し戦闘能力が高い。

それだけのこと。

人間を害するモノ達と違い、夜鬼は友好的。だが人間はそれを理解せず、少し【違う】だけで迫害する。

夜鬼は元々人間側についていた種族。それが理由でか、魔物側は彼らを嫌っている。

迫害され始めてから夜鬼の姿は見る見る減つていった。

『どこか。どこか誰にも見つからぬ地で、密やかに暮らしている』
と、仲間内から夜灯は耳にした事がある。
耳にした事があるだけで、実際には自分以外の者をこの眼で見たことはないのだが。

自分以外の夜鬼など、知らない。

自分が夜鬼なのだと、知らなかつた。

知らずに迫害を受け育つてきただ夜灯は、もつ少しで本当に鬼になつてしまつところを、この城の主に助けられたのだ。

それ以来、ずっと「ディア」を使っている。

そんな不幸な道を歩んできた夜灯にも、つい最近出来たばかりのだが、楽しく思えることが一つあった。

それは、主のディアルートとメモリ国王女メモリ、二人の関係。

少々弱氣ではあるが尊敬してやまない「ディア」と、気は強いが思いやりがある芯の強いメモリ。

この二人が一緒になつてくれるなら、誰よりも祝福するだらう。話が逸れたが、要は一人の関係がどう発展していくかに大変興味があるので。

一人の周囲に甘い空気が少しでも発生すれば、どこへでも駆けつけるのが彼、夜灯である。

つまり、一人の関係を常日頃から知つておきたい。

そして知つた後は、仲間にこつそりと耳打ちするのが彼の日常になりつつあつた。

そして今も、見たことをすぐ伝えようと、仲間の元に向かつている途中。

誰でも良いから、この胸の「ひづれ」を早く伝えたい！

夜灯の今の思考回路はただただその一点のみに集中しているのである。

城の廊下を全速力で突っ走つていると、夜灯はある人物を見つけた。

「お、リジアン！ ちょっと、聞いてくれよッ」

リジアンと呼ばれた人物は、ある一点を見つめたまま、ボーグとしている。

「リジアン？ リジアちゃん？」

再度声をかけるが、反応がない。
おそらく田を開けたまま寝ているのだ。「」。

夜灯は、リジアンの死人の様に青白い（とこりょつ、もつ真つ青）額にデコピンをお見舞いする。

確か、夜灯の記憶にある中で、彼はこの起しそれ方が一番嫌いだつたはずだ。

「いたッ」

「やあ、リジアン。ご機嫌いかが？」

「……最悪です。なんてことするんですか、こんなに愛らじい僕に」

「愛らしくないし、勤務中に寝ている奴が悪いぞ」

「では夜灯さんは、今まで何処をほつき歩いていたんですか？」

「どうせまたティア様とメモリ様をストーキングしていたのでしょうか。」

そんな夜灯さんに文句を言われたくありません」

”大体、特にすることも無いじゃないですか”
と呟くリジアンに、夜灯は言葉を返せなかつた。

そんな夜灯に対して、嫌味な笑みを浮かべているリジアン。
余計に己を虚しく感じたが、ここはぐつと我慢である。

「それよつさつき、主と王女がスッゲー良い感じだつたんだけど」「そう。良かったですね」

更に話を展開される前に先手を打つリジアン。
しかし、どうやら聞こえていなかつたらしい。

夜灯は会話を続ける氣、満々である。
リジアンは夜灯のストーキング話に付き合つ氣は毛頭無く、せめて違う内容に変えようと試みた。

「そういうえば、さっき、この僕にドロップンをしましたよね。
とっても痛かったんですねけど。もっとマシな起こし方は考えつかなかつたのですか？」
「考えつかなかつたね。だってさ、あれが一番リジアの嫌がるやつ
じゃん。

もう一度とされたくなかったら、仕事中に寝なけりや良い

どうやらリジアンの思惑は成功したらしいが、何やら妙な方向に

話題が転がり始めた。

「大体さ、何でそんなに眠くなるんだ？ ってか、リジアンの」と、
俺、よく知らねえんだよなあ」

「別に知つて欲しいとは思つていませんが」

だが、そんなことにも相変わらず無関心で、スッパラ受け答えをする。

しかもどうやらまた眠くなってきたらしく、髪と同じ灰色の瞳が
ゆるゆると細くなつていく。

「おい、言つてるそばから寝んなよ」

「五月蠅いです。初めに言つておきますが、寝るのも僕の仕事なん
ですよ。ちゃんとティア様から許可は出ています」「
すりいな、それ。俺も主に許可を貰おつかね」

とひつもなく馬鹿なことを言い出す夜灯。

「無駄ですよ。これは僕の種だけの特権ですか」「
「へえ。一体どういう種なんだ？」
「眠魅、です」
「みんみ？……わりい、聞いたことねえわ
「それは嬉しい限りです」
「……お前、友達無くすぞ……」

夜灯の何気に酷い言葉。

だが、リジアンは少しも気にしていらない様子だ。

「で、何で居眠りが眠魅だけの特権のかつてことを説明してくれ。寝るのは後にしてる」

「眠魅はね、その名の通り眠りに魅入られているんだよ」

夜灯ほど低くなく、リジアンの声よりは高くない。
不思議な声の音の持ち主。

二人はそれを聞くなり、すぐさまその場に片足折つて、膝をついた。

その声の持ち主は、この城に唯、一人。

「主……いつの間に……」

「ディア様、こんにちは」

青のかかつた黒い髪を肩まで伸ばし、長い前髪の奥に一つ、金色の瞳が覗いている。

髪を分けて突き出している尖った耳。
それらは、ヒトでない者。

そして一人の様な種でもない者。

つまり、この城”夜行城”の主、魔王の”ディアルート其の人だつた。

「説明は僕がするから、リジアンは寝てて良いよ」

「有難うござります。では、自室に戻させていただきますので」

「うん、おやすみ」

「失礼します」

そう一言残すと、クルリと方向転換して、リジアンは自室へ向かい歩みだした。

「じゃ、夜灯さん。後はディア様に聞いといてくださいね」「あ？え、ちょ、おい……」

夜灯の呼びかけも虚しく、リジアンは背を向けすたすたとこの場を去つて行つた。

残されたのは、にこにこと花の様な笑みのディアと先ほどまでの陽気さは何処へ消えたのか、少し意氣消沈している夜灯の一人のみ。

夜灯は助けてもらつたディアに絶大な尊敬の念を寄せている。だからか、ディアに見られている、と感じるとカチコチに身体が固まつてしまふのだ。

「とりあえず、座るつよ」

「は、はい」

言われた通りに、その場に座り込む。
ディアとは少し距離が空いていたのだが、それは彼が一・三歩寄つて来たためすぐに無くなつた。

「リジアンは眠魅で、だから寝ても良いんだよ」

「へ？ そうなんですか……」

いまいち的を得ないディアの喋り方に突っ込みもせず、夜灯はそのまま聞き続ける。

「さつき、眠りに魅入られているって言ったでしょ？ 眠魅はいつも眠いの。

でも、ただ寝てるだけじゃなくて、その間に力を溜めているんだ」「力？」

「そう、力。だから、彼らは普段ボーッとしているんだけど。

戦闘中はそこらの奴らじや太刀打ちできないぐらいに強いよ。もしかしたら、”夜鬼”的君よりも、ね

「俺よりも、ですか」「

この魔王城にいるからには、そこと強いくて思っていたが、まさかそこまでの実力をリジアンが持つてているとは思つてもいなかつた。自分を褒めるわけではないが、夜鬼の種はそんじょそこの魔物以上には強い、はずだ。

「ま、そんなの戦つてみないとわからないんだけどねー。

戦つてみる? リジアンと

」

ふいに、夜灯の視界いっぱいに木々を連想させる、黄色のかかって深緑が広がった。

動きに合わせて、ふわりふわりと波打つ髪。

「王女……」

思いいつく名前で呼ぼうとした時、バシコーンッと大きな音が目の前で鳴った。

普通ならば、何事かとすぐに前へ覗き込むだらうが、ここはさすがに魔王と王女のストーカーというべきか、起こったことに予想がつき、落ち着いたものである。

「うう……頭は叩かないで、メモリ。魔王の僕が、馬鹿になつたらどうするの……」

余程、力を込めて叩かれたらしく、ディアは涙目になりながら頭を押された。

「は、馬鹿? 大丈夫。安心なさい。もうそれ以上馬鹿になる」と

はないから！

「ヒドイよ！」

「ああ、もうー。気持ち悪い声出せないでよねーー！」

それよりも。もう、さつきみたいな不穏な発言は控えなさいよ。唯でさえ、最近兵士の中にあなたのことを不快に思つてゐる奴がいるんだから……」

その言葉と同時に、メモリはさつと皿を伏せた。

”兵士の中に、魔王のことを不快に思つてゐる者がいる。”

確かに、それは夜灯も小耳に挟んだことがあった。

漆黒の闇に、灰色の光。

それは決して明るくはないが、闇に染まつてはいない。

この城の魔王。””イアルート””は、常にその状態を守つてゐた。闇に染まりきらない主を見て、疑問に思つて兵士も少なくは無いだらう。

それなりに地位を持つてゐる者。または城の中に勤めている者達は、この魔王の様子を見ている。

しかし、ただの一般兵士にとつて魔王とは、例え仕えていても、おこそれとその姿を目にする機会がないのだ。

”魔王とは、強くて聰明で美形”

彼らの持つているイメージは、そんなものだ。

ディアが強いかどうかは不明だが、聰明といつぱんは当てはまらない。美形という点もヒトによつて、だろつ。

始終顔が緩んでいるので、美形かどうかが分からない。そんなディアを不快に思つるのは、仕方の無いことだ。

「そーれーなーら、大丈夫！」

「無意味に言葉を伸ばすのは止めなさい。で、何で大丈夫だなんて言つられるの」

「もうその人達、僕のこと嫌つて思つてないから」

面と向かつては言えないが、心では心配をしているメモリの気持ちを理解したのかしていなか。

ディアは朗らかに、そして、高らかに言つた。

「主、何をしたんですか？」

「ちょっとだけ、忘れてもらつたんだ」

「は？」

「どうこいつ」と？」

「一時的にその気持ちを忘れてもらつたの。でもまた、近い内に思い出すんだけどね」

さり、と怖いことを口にするディア。

どうやら、自分の力の一部を使って、実力行使をしたらしい。
夜灯は”ですが、主……！”と心でディアへの株を上げたのだが、
この行動はメモリのお気にめさなかつたみたいだ。
ディアは、再度メモリの鉄拳を受けてしまった。

「その場しのぎは止めなさいって言つたでしょ？」「…」

ディアの意識が無くなつたところで、暗転。
次は、彼がまた目覚めるまで、しばしお別れ。

ストーリー1 「魔王と王女+××」 終わり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5769f/>

魔王と王女シリーズ

2010年10月9日12時57分発行